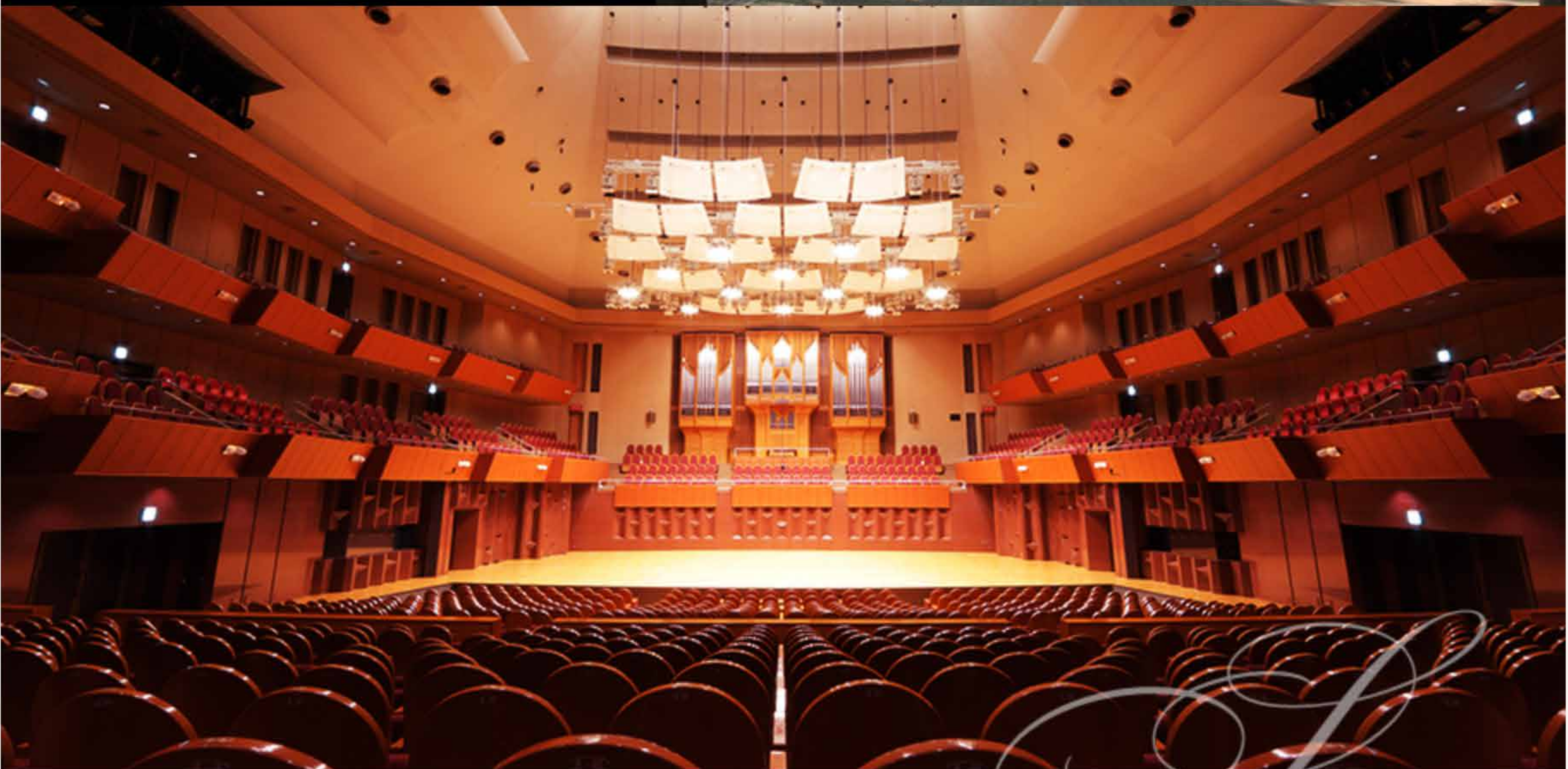


30余年という年輪を重ね、白亜の外観を覆うまでに育ったプロムナードの並木。最高峰のクラシックを聴く喜び、高揚感、様々な想いがこの道を通り抜けていく。ザ・シンフォニーホール——。シンプルな名称に配された定冠詞『THE』には、“日本初のクラシック専用ホール”としての矜持がにじむ。大阪の街とともに歩んできたこのホールの魅力を、いま一度振り返りたい。

DISCOVER THE SYMPHONY HALL



Sound

すべてが最高の音響のために。

ウィーン楽友協会ホール(ムジークフェライン)、アムステルダム・コンサート・ヘボウ。19世紀の建造物でありながら、いまだ世界最高峰の音響と評されるコンサートホールを手本として、ザ・シンフォニーホールは建てられた。「絶対目標は残響2秒(三上泰生著『残響2秒』より)」を掲げ、10分の1の模型を使って、幾度も音響実験を繰り返し、ホールの床のタイルや壁の仕上げ、椅子の設計までもがなされたという。鳥をイメージして天井に設置された40枚の反響板や、照明と一体になった音響反射板は、音響効果はもちろん、空間デザインとしても功を奏している。これまで、日本では果たせなかった夢でもある「もっとも良い響き=残響2秒」。些細な環境の変化にも左右される「音楽」を相手に真っ向から勝負した技術者、スタッフの労苦の結晶は、アーティストから紡ぎ出されるメロディと相まって、永遠に観客の心を驚嘆みにしていくことだろう。



音楽史を彩る、音楽家たちの晴れ舞台。

1982年、朝比奈隆、小澤征爾の両巨匠らの指揮、国内5つのオーケストラ(大阪フィル、札幌響、京都市響、NHK響、新日本フィル)シリーズで幕を開けた「ザ・シンフォニーホール」。以降、このホールを愛し、輝かしいパフォーマンスを残した世界の名指揮者はカラヤン、バーンスタイン、アバド、クレーヴェルク、ラトル、ゲルギエフ、ティレマン…と、枚挙にいとまがない。特にザ・シンフォニーホールを「世界一の響き」と評した“帝王”カラヤンは、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団を率いて84年に初登場し、観客を感動の渦に巻き込んだ。2度目となる88年の登壇は、彼の最後の日本公演ともなった。そのほか、ブーニン、キーシン、ヨーヨー・マ、カレラスら様々なジャンルの第一人者が、このホールで音楽ファンを熱狂させている。また、ウィーン・フィル、シカゴ響、イスラエル・フィルなど各国のトップ・オーケストラが幾度となく来日。国内に目を転じれば、在阪オーケストラの定演会場としても定着して、入場者数はすでに900万人を超える。これからもこのホールで、音楽史に残るような名演に立ち会えることが楽しみでならない。



ソロでもオーケストラでも 欠かせない、荘厳な響き。

世界有数のオルガンビルダー、スイス・クーン社製パイプオルガン。アリーナ形式の舞台正面に堂々と据えられたこのオルガンは、クラシック専用ホールとしての覚悟の表れである。当初、想定されていたのはバレエやオペラ、演劇も上演できる多目的ホール。パイプオルガンを舞台正面に設置すれば、それは叶わなくなる。それでも、路線変更をしたのには、3週間にわたる欧米視察と、パイプオルガンの必要性を強く説いた巨匠・朝比奈隆の存在があった。「本格的なコンサートホールには、ヨーロッパの伝統的なパイプオルガンが欠かせない」。ホール完成予定を2ヵ月伸ばしてまで、オルガンを導入したこの決断が、30余年にわたり日本のクラシック音楽をけん引してきた。オルガンコンサートの他にも、オルガンを伴った交響曲、大曲では、荘厳な響きでオーケストラ作品を支えている。3732本のパイプ、54ストップ。先人の英断に敬意を表しながら、54の音色に酔いしれたい。